

アティカス、
冒険と人生
をくれた犬



FOLLOWING
ATTICUS
Tom Ryan

トム・ライアン 著

金原瑞人・井上里 訳

R. R. に捧ぐ——いつも心のなかにいるあなたへ

「旅を続けるのは骨折り損——ここから先は未開の地」
人々はそう戒め、わたしは従った（略）

だが、やがてあの声をはじめた。良心のようにたえまなく、
昼もなく夜もなく、囁き声が絶えずわたしをけしかける——

「何かが隠れている。探しにいくがいい。あの山のむこうには何かがある——
山脈のかげに隠れている。人知れずおまえを待っている。さあ、いけ！」

——ラドヤード・キプリング、「冒険家」より

「計画どおりの人生など、迷うことなく捨てなさい。

そうすれば本当の人生に出会えるでしょう」

——ジョーゼフ・キャンベル



CONTENTS

地図	ホワイト山地の4000フッター	2
プロローグ		6
第一部	マックスウェルとアティカス	11
1.	ドアが開くとき	12
2.	「どこへいくときも連れていきなさい」	39
3.	大きな変化	56
4.	ギフト	73
5.	「冬山は死者が出る」	87
6.	子どもたちのために	109
7.	大冒険	117
8.	小さな巨人	124
9.	道を照らす星	135
10.	「M」をお忘れなく	140
11.	「信仰心は時おりのもの」	146
12.	アティカスを隠せ	152
13.	アジオコーチフックの不思議な力	155
14.	「五日間の強行軍」	166
15.	「ありがとう」	171

第二部 闇を照らす光

16.	事態の急変	178
17.	「ひとりにするわけにはいかないんです」	188
18.	アテイカスの仲間たち	193
19.	ソウルワーク	201
20.	パンくず	209
21.	フランク・キャプラとディナーを	216
22.	約束	222

第三部 元の場所へ

23.	新たな冒険	230
24.	すぐそばにある魔法	235
25.	フランコニア山脈の死神	241
26.	父への最後の手紙	246
27.	あの目。あの美しい目	254
28.	ワシントン山	263
29.	別れ	267
30.	胸の痛み	273
31.	散歩という偉大な芸術	283
32.	ページ	289
33.	家へ	296

プロローグ

父さんへ

お気に入りの写真を同封するよ。土曜日に、ワイルドキャット山のポールキャット・スキークースを下^{くだ}っていたときに撮ったんだ。

遠くのほうで偉そうにそびえているのがアダムス山とマディソン山。ふたつの山と、近くでそびえるワシントン山の山頂は、白い岩がむき出しになっている。だけど、中腹からふもとまでは、豊かな森におおわれているんだ。木々にも兵士のような階級があるのか、上と下では色がちがう。頂上近くに広がる常緑樹は寒さに強く、青々としている。それが下へいくと、落葉性の木々が混じりはじめる。この季節、落葉樹はネイティブ・アメリカンが戦の前にほどこす化粧のような色に染まる。赤やオレンジや黄色に紅葉した木々は、戦いに沸き立つ兵士たちのようだ。色のうねりに目を奪われていると、木々がほんとうに生きているみたいに見える。いまにも雪崩^{なだれ}を打って戦いにとびこんでいきそうだ。

こっちに向かって流れてきた木の兵士たちは、ふもとまでくると、張りつめた空気をたたえて整然と戦線を張る。上のほうから前進の号令がきこえてくるのを待っているみたいだ。

その前は野原だ——褪せた黄色と緑の草におおわれている。長いあいだに平らにならされ、幾度となく戦いが繰り広げられてきたかのようだ。木の前線から数メートル広がる草地のこちらに

は、ぼくの相棒が背を向けてぽつんと小さく座っている。はるか彼方まで続く木々の大軍を眺めているんだ。

相棒は、ひとりで、まっすぐに体を起こして座っている。木々の波がくだけるのを待っている。それがどんなものであれ、解き放たれた世界が自分に向かってくるのを受け止めようと待っている。穏やかで（迫りくる試練に身をまかせるともりなのかもしれない）、控えめで、勇ましい。道はかならずみつかるという信念があるのだ。

ぼくの相棒は、フロド・バギンズで、ドン・キホーテで、ハックルベリー・フィンだ。家から一歩足を踏みだした瞬間、冒険に巻きこまれてしまった英雄だ。

写真を見てみると、哲学者で詩人のウィリアム・アーウィン・トンブソンの一節が頭に浮かんでくる。「境界までやってくると、目の前の大自然がわたしたちに伝える。まさにいま、おまえは過去の自分を越えていこうとしているのだ、と」

相棒はそこに座っている。野原に、たったひとりで。トンブソン言うところの「境界」で山と向きあう姿は、荒々しい自然の中でひとときわ小さくみえる。それでも座り続ける。目をそらさない。背を向けることも逃げだすこともしない。

写真に収まった小さな姿は、ぼくの登山の相棒、アティカス・M・フィンチだ。この名は『アラバマ物語』に登場する謙虚な英雄にちなんで付けた。

去年の五月二十一日からこれまで、心優しいアティカスは、ぼくと一緒に山登りを続けてくれている。それまで、ぼくたちはろくに運動をしなかった。ニューベリーポートの自宅でのんびり過ごすことがほとんどだった。森や浜辺を少し散歩することはあっても、それ以上の遠出をすることはまずなかった。ぼくは重量オーバーだったし、体がなまっていた。ところが去年、四十八

の四千フッター「ニューハンプシャー州にある四十八の標高四千フィート以上の山の呼称。四千フィートは約千二百メートル」を登るという体験をしたとたん、ぼくたちはたちまち熱中し、四十八すべての山を十一週間で制覇した。あんまり短期間のうちに終えてしまったので、春から秋にかけてもう一度同じ山々を登ることにした——今度は、ゆっくり時間をかけるつもりだ。

樹林を見下ろすアティカスをみていると、四十八の山々を称える気持ちがあたためてわいてくる。だけど、それ以上にぼくは、この好奇心の強い小さな犬をすばらしいと思う。こんな登山の相棒がいるなんて、ぼくはなんて幸運なんだろう。風の日も晴れの日も、雪の日も雨の日も、アティカスは、ぼくと共に山を登ってきた。たいていはふたりきりで、ぼくたちの絆は日増しに強くなった。

大自然と向かいあって座るアティカスをみながら、ぼくは本に出てくる英雄らしからぬ英雄たちのことを考えていた。思いもよらない試練に直面し、成長し、それまでとはまったくちがう人間になり、物語が終わる頃には、「過去の自分を越え」てしまう。そして、読者ははつきりと悟る。よろこびもあれば悲しみもある。いい日もあれば悪い日もある。これからもいろんなことがあるだろう。だけど物語が終わり、夕陽のむこうへ歩きさったあとも、その先どんな試練や苦難が待ちかまえていようとも、彼らは乗りこえていける。だけど、そこまでわかっていながら、ぼくはやっぱり本を閉じるのがさみしい。お気に入りの登場人物たちにさよならを言うのがつらい。ひとつの冒険を終えるときも、これとまったく同じ気分になることがしょっちゅうある。最後のページを読みおえ、本を閉じ、これが最後だと思う瞬間、まさに友だちを失ったような気持ちにさせてくれる物語。それこそが、いい物語なんだと思う。

うれしいことに、ぼくたちの場合は本が終わったわけじゃなくて、章がひとつ終わったにすぎな

い。ぼくとアティカスには出かけるべき冒険がたくさんあるし、そのための時間はまだまだたっぷりある。実をいうと、次の冒険は、ちょうど二カ月後にはじまる。次回もひとつの物語になるにちがいない。

ぼくたちはスキーコースを下りつづける。下草をかき分け、太陽の光を浴びて金色に輝く木々のあいだを縫っていく。自分が感じていることをひとつひとつ確かめ、目に映る美しさをスポンジのように吸収する。アティカスをみるときに湧いてくる感動は、山と、木々と、そのふたつをよく知る風に対する感動と同じ種類のものだ。楽しげに足を弾ませて坂を下るアティカスをみていると、自然と笑顔になる。ほかにどんな顔ができるだろう？

ぼくはこの小さな犬——おいしいごはんを食べたあとは、体重が九キロになる——を眺めながら、ふと、気づいた。ぼくがアティカスを心から愛しているのは、物語に登場する控えめな英雄たちと同様、その小さな姿からは計り知れないほどの魅力を、内に秘めているからなんだ。ぼくはほんとうに幸運だ。アティカスは、山歩きの相棒だけじゃなくて、友だちにもなってくれるんだから。

時々ぼくたちは、すばらしい一日に恵まれる。達成したことがすばらしいのではなくて、感じたことがすばらしく、その後何度でも思いだしてしまうような一日。昨日も、そういう一日だった。ふたりでひとつの章を終え、そしてまた、新しい章を求めて出発したんだ。

二〇〇六年、十月八日

愛をこめて、トムより。

第一部 マックスウェルと アティカス

Part I
Innocence Lost, Innocence Found

あなたのいく道が悪路で、曲がりくねり、寂しく、
危険でも、やがて息を呑むような景色に出会え
ますように。あなたの登る山々が高く、雲の上
にまでそびえていますように。

——エドワード・アビー（作家）



アティカスは生まれたときから芯のしっかりした犬で、好き嫌いもはっきりしていた。
写真は生後数カ月の頃、リードの存在意義について考えこんでいるところ。

1. ドアが開くとき



わたしは変わった人生を送っていた。すごくおもしろそうだね、と言われることもあった。編集者で、出版者で、自分で立ちあげた新聞社の唯一の記者だった。その新聞には、ここニューベリーポートで起こる日々の出来事を、詳しく記録していた。住まいはマサチューセッツ州ノースショアにある小さな町にあった。金はないが影響力はあり、幸福だがストレス過多で、仕事は充実しているが人生はそうでもなかった。自分はそれなりの人間だと思いつつ、それでいながら、いつもなにかが物足りなかった。

毎晩のように市役所の会議を取材して、それが終わると何時間もぶっ続けで職員たちとおしゃべりをして裏話をききだす。日中は、いろんな職業の人たちと話をし、彼らが教えてくれる町の秘密に耳を傾けた。人口一万七千人のこの町では、どんな人にもネタのひとつやふたつはある——隣人の噂話ならその倍はある。こうしてできあがったわたしの新聞は、二週間おきに発売され、ほぼ毎号が売りきれた。ニューベリーポート民なら、読み逃すわけにはいかない。彼らの世界は、メリマク川が大西洋に流れこむ、この小さな町を中心に回っているのだから。

わたしは、ダウントアウンの中心部に建つ古いアパートの三階に一人で暮らしていた。夜遅くにソファで眠り、朝早くに起きた。目覚まし時計はいらない。大西洋から太陽がのぼると、朝の光がプラムアイ

ランドとメリマク川の水面を照らし、ジョツパ湿原を輝かせる。古い趣のあるサウスエンドの住宅街が、ぼんやりと明るくなっていく。やがて、ダウンタウンに並ぶレンガ造りの建物が、燃えるように照りかがやく。まばゆいオレンジ色の光がレンガの谷に反射し、アパートの西向きの大きな窓から射しこめば、わたしは自然と目を覚ました。

だが、火曜日だけは事情がちがった。冬場はとくにそうだった。日が短くなり、夜明けは遅くなる。この時期にわたしをたたき起こすのは、ステート通りをやってくるゴミ収集車の騒音だ。耳ざわりなギア音、ブレーキが軋る音、ゴミが投げこまれる音、圧縮機が立てるガチャンという金属音。わたしはベッドを飛びだし、ゴミ袋をつかみ、階段を一階まで駆けおりる。間に合いますようにと祈りながら裏口を開け、チャーター通りに駆けだす。五年間、ゴミ収集車との競争を続け、時には勝ち、時には負けた。近所の人たちがしているように、月曜の夜にゴミを出しておく、ということとはしなかった。やめておけ、と言われたからだ。ここニューベリーポートは、むかしからたくさん秘密を抱えてきた町だ。町並みは絵葉書のように美しいが、その半面、人の好奇心をかき立てる暗い部分も持ちあわせている。秘密を商売道具にし、秘密を打ち明けてくれる人たちとうまく付き合っていくべき身としては、慎重を期すに越したことはない。だが、五年もたつと、神経をすりへらすのにも飽きあきしてくるし、ゴミ収集車との競争にもうんざりしてくる。とうとう、ある月曜日の夜、わたしはゴミ袋を四つ持って、収集場へ出しにいった。運の悪いことに、その晩、何者かがわたしのゴミを盗んだ。生涯最大の冒険がはじまったのは、この夜だ。

わたしの新聞は「アンダーボード」紙という。ジョン・アーヴィングの『ガープの世界』に出てくる言葉をもらった。この造語は、目に映る部分がどれだけ美しくても、物事の裏にはかならずなにかが隠

れている、という意味だ。新聞名としては変わっているが、そもそもニューベリーポートという町が変わっている。画家のノーマン・ロックウェルとアルフレッド・ヒッチコックの世界観を混ぜ合わせたようなところで、古参者と新参者、ストレートとゲイ、古くからいるニューイングランド人と新しくやってきたアイルランド系やギリシャ系が、一緒に住んでいる。町がまっぴたつに分かれて争いあった話なら、語りつくせないほどある。

ニューベリーポートは、ウィリアム・ロイド・ガリソンの生まれ故郷だ。ガリソンは奴隷廃止論者で、この町で記者としての腕をみがいたあと、ヘリベレイター紙という全国紙を立ち上げ、奴隷制を廃止すべく声をあげた。この町はまた、アンドルー・J・ボッシー^{いばり屋}・ギリスの故郷でもある。ギリスは貧しい地区で生まれ育ち、二十回ほど市長選に出て六回当選した。これほど興味深い政治家は、アメリカ中を探してもいないと言っている。ボッシーも、政敵をやつつけるために自分で新聞を発行していた。ヘアスベスト紙^{ヘアスベスト}というのがそれで、名前の由来は「断熱材でも使わないと危険すぎて触れられない」かららしい。ニューベリーポートは、ジョン・P・マーカンドというピュリツァー賞受賞作家も輩出した。彼の作品には、地方の上流階級が繰り返し登場する。さらに、一九三〇年代から四〇年代にかけてのおよそ十年のあいだ、厳格で古めかしい階級制に支配されていたこの町には、シカゴ出身の人類学者にして社会学者のウィリアム・ロイド・ウォーナーが住んでいた。ウォーナー率いる三十人の調査団も一緒だった。ニューベリーポートを調査した「ヤンキー・シテイ」と呼ばれるプロジェクトは、アメリカの町を対象にした研究のなかでは、おそらく研究期間が最長のものだと思う。

わたしはこうした人物たちと比較されるが、よく言われるのは、ガリソンとギリスを足して二で割ったような男、という表現だ。言っではなんだが、自分では、どちらかというギリスのほうに似ていると考えている。ニューベリーポートで悪党について書きたてるつもりなら、人前で言い争うような気概

が少しくらいあったほうがいい。〈アンダーワールド〉紙第一号では、自分の目標についてこんなふうに記した。「暗闇を照らし、害のある雑草をむしり、毒をもつて毒を制したい」。こんな目標を掲げて醜聞を暴くいっぽう、ロマンチストを自認してもいる。しよっちゅう、ラルフ・ウォルドー・エマソンやヘンリー・デイヴィッド・ソロー、色々な実存主義者たちの言葉を引用する。不正に腹を立てることは多いが、この町の未来や可能性には、心から期待している。

一度、〈ニューベリーポート・デイリー・ニュース〉紙に新しく採用された女性が、ライバルであるはずのわたしに会いにきて、こうたずねたことがある。「ここはどんなところ?」

「みたこともないようなところかな」わたしは答えた。

彼女は、聞き飽きたというような顔になった。「いままでいろんな町にいったけど、みんな同じことを言うのよね」

一年後、女性はボストンのテレビ局に転職することが決まった。わたしは彼女にたずねた。「ここはどんなところだった?」

「みたこともないようなところだったわ!」

この町は個性的で、人も個性的だ。最初は捕鯨の基地で、造船業や海運業も興って、さらに、織物工場や靴工場ができていった。しかし、五〇年代から六〇年代にかけ、様々な工場が相次いで倒産したり移転したりするうちに、町はしだいに衰退していった。すると、当時の政治家のなかでもとりわけ強圧的だった男が先頭に立ち、ダウントウンに並ぶ立派なフェデラル様式の建物を取りこわし、シヨッピングモールや駐車場を造ろうとした。反対する市民が団結して建築家を雇い、古い建物を保存すればダウントウンの景観がどんなふうになるか示してもらい、取りこわしをやめさせるよう裁判所へ訴えた。市民団体は勝訴し、ニューベリーポートはダウントウンを取りこわすのではなく、古いまま保存して再開

発するために住宅都市開発省の助成を受けたアメリカで最初の町になった。この一件を契機にして町はみるまに復興したが、地元民の苦労は以前よりも増すことになった。美しい景観を気に入った者たちが新たに住みはじめると、町は高級化して、昔からの人々が出ていかなくはならなくなった。残った人々もここが自分の町とは思えなくなり、なじみの店が一軒また一軒と姿を消しては跡地に高級ブティックが建てられるのを嘆いた。

こうした変遷のあいだにも、ニューベリポートにはただひとつ変わらないことがある。腐敗しきつた政治だ。政治家は王のように振る舞い、ほとんどが墮落している。権力を持つ者は、それにしがみついたためならどんな手でも使う。地元民にとって、敵は新参者とは決まっていない。おなじ地元民にも油断はできない。ニューベリポートを「共食いの町」と呼ぶ者もいる。バケツに入ったカニみたいだ、と言う者もいた——だれかが這いあがろうとすると、残りの者たちがやつきになって引きずりおろそうとするからだ。近親相姦と激しい内輪もめがいたるところで起こる町——ジャーナリストにとっては理想的な町だ。

わたしがここにやってきたとき、政治は混乱のきわみにあった。ちょうどこの時期、それまで町を牛耳っていた典型的な南部男たちが、^{グッド・オールド・ボーイ}権力を奪われた。町にきてたった三年の人間が市長になったのだ。新参者の新しい市長は、女性で、レズビアンだった。いばりくさった男たちがのさばる息苦しい地方都市に、さわやかな新風を吹きこんだというわけだ。わたしがきたときは二年の任期を終えようとしている頃で、グッド・オールド・ボーイたちは、彼女を市長室から追いだすついでに町からも追放しようとしていた。

わたしはそれまで、政治に関わろうとか、新聞を立ちあげようとか、考えたことは一度もなかった。それでも、男たちがよくない噂や風評を立てて若い市長をいじめるのを見ると、居ても立ってもいられ

ず、争いの場に飛びこんでいった。わたしは、日刊紙や週刊紙に投書した。そうとは知らずにガリソンやギリスと同じ轍^{わだち}を踏み、対立候補を名指しで批判したのだ。ニューベリポートではあまり一般的なことはない。選挙は大混戦になり、その女性の市長が僅差で勝った。対立候補はずいぶん前、五期連続で市長を務めたことのある男だ。わたしは町にきたばかりだったが、地元の人たちは、編集者に出したあの手紙が市長の当選を後押ししたのだと言ってくれた。それから一年後、〈アングダード〉紙が誕生した。まもなくして、〈ポストン・グローブ〉紙は、わたしの新聞を「ニューベリポートの裏側を内側から暴く」と評した。

町でどんな立場にいるか、だれとどんな関係にあるか、それによってわたしは暴露記者にもなり、改革者にもなった。グッド・オールド・ボーイたちに噛みつき、〈ニューベリポート・デイリー・ニュース〉が長らく守ってきたタブーを無視した。報道については初心者だったが、無知ゆえに救われることもあった。わたしは、表舞台には登場しないふつうの人々の話に耳をかたむけた。従来の新聞の気に入らないところを考えて、それとは真逆のことをやった。一面記事はいつもセンセーションナルで読者の好奇心をかき立てたが、事実にしっかり根差していた。自分の体験にもとづいて記事を書き、どの号でも、できるだけたくさんのお名前を出した。世間の人たちが組織や議会にあまり興味がないのは、なかの人間と関わる機会がないからだ。ところが、全員が全員のお名前を知っている小さな町では、ジムでみかける市の職員が、息子のリトルリーグのコーチだったり、地元のレストランの店長だったりする。わたしの新聞は、あらゆる立場の人たちの考えや気持ちを紹介した。

わたしは、地元出身の市会議員たちを手厳しく批判した。新参者だというだけの理由で、なにかという市長の邪魔をするそのやり口に我慢できなかったからだ。そして、公職にある古参者と新参者のあいだに明らかな溝があることを、何度も特集を組んで指摘した。政策会議の取材は収穫が多いというの

に、他紙の記者はほとんどいなかった。そこには時々、立場上、出席すべきではないのにやってきて、友人や仕事仲間のために便宜を図ろうとする議員がいた。そういう連中をみつけると、わたしはかならず州の倫理会議所に報告した。議員を辞任させたのは、一度や二度ではない。

テレビ放映される会議で市議員や地域のリーダー的人間が平然とウソをつく姿をみて、ぼう然としたこともある。わたしがそれを報道すると、彼らはまるで、わたしが反則をしたとでも言わんばかりの顔をした。見方によっては、そのとおりだ。だが、慣例だからといって、悪事を見逃すわけにはいかない。彼らは無節操にウソをついた。ある一件のことはとくによく覚えている。地元の開発者たちと親しい市会議員が、空き地を数エーカー買い取って開発しようとする市の決定に、口から泡を飛ばして反対した。隣接する墓地に兄が埋葬されているからというのがその理由だった。墓地は丘の上にあるという。その議員は環境保護活動家よろしく、開発によって古い墓地の地層がゆがみ、土地が不安定になって墓の一部が崩れてしまう恐れがある、と主張した。だが、問題がひとつあった。市会議員の兄はたしかに亡くなっていたが、墓は別の場所にあったのだ。

とにかく、ひどい連中ばかりだった。取材した何人もの市長は言うまでもない。彼らは最高の特ダネを提供してくれた。倫理的に問題のある人間を（選挙戦のスタッフで自分を当選へ導いたという功績だけで）議員に選んだとか、支援者のために土地取引を裏で操作したとか。〈アンダーワールド〉紙が発行されているあいだ、そうした市長たちは短期間で去っていった。たいていは、最初の二年の任期が終わるといなくなった。

もちろん、悪いことばかり取り上げたわけではない。町の汚点を指摘するいっぽうで、いい点にも光を当てた。議員の勇氣ある投票や市長の立派な姿勢は紙面で支持し、市議会や会議所の良心的な人物や優秀な職員には賛辞を送った。「ニューベリーポートを愛する十の理由」という連載では、立派な仕事

をしている人々を十人紹介した。歴史的な建物を保存すべきだという信念を持っている開発者、仕事に誇りを持ち本と読書家を愛している図書館司書、欠勤することなく客のほぼ全員を名前で呼んで挨拶するスーパーマーケットのレジ係。そして、毎年十二月になると、「今年の人」を少なくともひとりを選び、とり冷静さを失わない人物だったからだ。

わたしには、記者としての資格がまったくない。学校でジャーナリズムを学んだわけでもないし、執筆経験といえば編集者に送った何通かの手紙くらいしかない。政治のことはよくわからなかったが、自分が政治家のどんところが嫌いなのかはよくわかっていた。予備知識は、ケネディ一族や建国の父に対する、わたしの父親の郷愁くらいだ——「最も偉大な世代」^{ザ・グレイテスト・エイジ}の一員である父親は、そうした政治家にこそ、その呼称がふさわしいと考えていた。

父親のジャック・ライアンは、政治的な活動に積極的に参加していた。九人の子ども全員に命じて、民主党候補者のオフィスならどこへでも手伝いにいかせた。子どもたちがその候補者を知らないことも、手伝いなんかしたくないことも、友だちと外で遊んでいたいことも、父親にとってはどうでもよかったのだ。わたしたちは命じられるがままに、マサチューセッツ州メドウエイの家々を一軒ずつ回って投票を頼み、選挙のパンフレットを配った。週末になると、父が支持する候補者を応援する札を持って、何時間も立っていないではならなかった。だがわたしも兄や姉たちも、いったん家を出ると、政治的な運動からはできるだけ距離を置いた。うんざりしていたのだ。

ジャック・ライアンの政治的信条は少し複雑だった。リベラルなアーチャー・バンカー「テレビドラマ『All in the Family』（一九七一〜一九七九）の主人公。保守的で差別用語も口にする」といったところだ。人は平

等であるべきだと信じているが、自宅のとなりにマイノリティが越してくるとなると話は別だ。

ある年の夏、わたしはアイオワ大学で学生アスレチックトレーナーをしていて、たまたまハーレム・グローブトロターズ「エキシビション」を専門にしたバスケットボールチーム」のトレーナーと、数名の選手と過ごす機会に恵まれた。それをきいた父親は、わたしに言った。「財布から目を離すなよ」「父さん、みんな大金持ちだよ。ぼくなんか、週の稼ぎがたった五十ドルで、学生寮みたいな部屋で暮らしてるんだ。そんなやつは財布を盗むわけないだろ」

「関係ない。やつらはそういう性分なんだ」

七年生（中学一年生）のとき、わたしは町で唯一の黒人の女の子に恋をした。白人一色の町の中で、彼女は息を呑むほどエキゾチックで目立っていた。ある晩、夕食の席で彼女のことを話すと、父親は、その子と付き合いおうだなんて考えるんじゃないぞ、と言った。わたしへの脅しではなく、父はこう考えていたのだ。万が一ふたりが結婚でもしようものなら、黒人と白人のハーフになる赤ん坊がかわいそうじゃないか、と。わたしはまだ七年生だったのに！

ある夜、高校の友人にノーマン・フィンケルシュタインという名前の子がいると話したときも、不審そうな目でわたしをみた。「ユダヤ人と友だちなのか？」

「うん、いいやつだよ。なんで？」

父親は肩をすくめた。「アイルランド系がユダヤ人と仲良くなるなんて、きいたこともない。ユダヤ人はユダヤ人だけで固まるものだからな」

父が身の回りのことをできなくなった晩年、兄のデイヴィッドが父の財産管理を任せるために選んだ弁護士の名前をきいて、わたしは、これは面白いぞと思った。認知障害が出はじめていなかったら、父はいったいどんな反応をしただろう。というのも、弁護士はユダヤ人で、ライアン・シュワルツという

名前だったのだ。父は、自分と同じライアンという名前をよろこんだだろうか。それとも、シュワルツというユダヤ系の名前に顔をしかめただろうか。デイヴィッドは、父さんは満足するに決まってる、と言った。ステレオタイプな人だから、ユダヤ系なら金の扱いを心得ているだろうって思うんじゃないかと。父の頭がはつきりしていたら、まちがいなくこんな嫌みを言っただろう。「いい弁護士を選んだな。だが、ちゃんと見張っとけよ」

こんな父だったが、黒人であれ、アジア人であれ、プエルトリコ人であれ、ユダヤ人であれ、どんなマイノリティであつても、攻撃されているのを目撃すると、かならずかばおうとするのだった。

父を理解するのはむずかしい。世代の違いと育った環境の違いのせいだろう。父はボストンのアイルランド系カトリック教徒が住む最貧困地域で生まれ育ち、世界恐慌期に成人したのだ。

姓がイタリア系の友人の話をする、父は言った。「イタリア系か？」「イタリア系でユダヤ系だよ」わたしが返事をする、父は「信じられん。ユダヤ人とイタリア人が結婚したのか？」と言ひ、戸惑った表情で考えこむ。自分が育った世界では、およそ起こるはずのないことだったのだ。

最終的にわたしは、父の不平を受けながし、不愉快な言葉を笑いとはす術^{すべ}を身につけた。若い頃は、父の考え方に嫌悪さえ感じたものだが、年を重ねたおかげで、父の偏見を相手にせず、時にはちくりとやり返すことさえできるようになった。父と別れるときは、かならず顔を寄せてさよならを言い、キスをする。これをやると、ゲイ恐怖症の父親は、きまって居心地悪そうにする。わたしはもちろん、父が嫌がるのをわかっていて、そんな挨拶をしている。一度、オスカー・ワイルドを読んでいるんだと話すと、父は露骨に顔をしかめて言った。「オカマの本なんか読むのか？」。ゲイでユダヤ人の歌手マイケル・フアインスタインのライブにいったときは、当然ながら、息子はいよいよ気がふれたと思っただけらしい。わたしはウソをついた。「父さん、心配ないって。『ダニー・ボーイ』『アイルランド民謡として有名』も歌

うんだ」。信じられないことに、この一言で父は胸をなでおろした。

だが、父親は別の顔を持ってもいた。ジョン・F・ケネディとロバート・ケネディが撃たれたときは声をあげて泣き、ヒューバート・H・ハンフリーが大統領選でニクソンに降されたときは目に涙を浮かべ、子どもたちをゲティスバーグに連れて行って、北軍について、北軍が勝ち取ったものについて誇らしげに語った。ジョージ・W・ブッシュの対テロ戦争中に、アブグレイブ刑務所でイラク人捕虜が虐待されていたニュースを知ると、生まれてはじめてアメリカ人でいることが恥ずかしくなった、と言った。その半面、孫全員のために銀行口座を開設したときには、姉の養女をひとりだけのけ者にした。ヒスパニック系の少女は、「血統が悪い」にちがいない、というのがその理由だった。

ジャック・ライアンの生きる世界では、東洋系、ポーランド系、イタリア系、プエルトリコ系、アフリカ系アメリカ人より悪者なのは、共和黨員だけだった。

父のこの偏見以外にも、わたしたちが何年も口をきかなかった理由はいくつもある。父の政治的な価値観は理解しがたかったが、それよりも複雑だったのは、子どもたちとの関係だ。父がわたしたちを愛していたことはまちがいない。口に出して言うことはなかったし、そんな素振りもめったにみせなかったが、それでも愛していたと思う。だが、それと同じくらい、父は子どもたちをうつとうしく感じていた。わたしは九人きょうだいの末っ子で、生まれた頃にはすでに、父親は人生に打ちのめされていた。父は家族というより他人のように振る舞い、それはどの子と接するときも同じだった。優しい顔をみせることはまれだった。子どもたちを締め出す壁を自分のまわりに高々とめぐらせ、わが子には愛のむちを振るうべきだと信じて、しょっちゅう折檻せつかんをした。怒りっぽく、辛辣しんらつで、人生に無視されていると感じていた。

父も幼い頃からそんな人間だったわけではない。子どもの頃は本の虫だった。想像力が豊かで、いつ

か訪れるかもしれない異国の地を夢みたり、世界はどんな秘密をみせてくれるのだろうかと空想したりしていたようだ。いつか金持ちになって、有名になってみせると考えていた。ところが、はじめての冒険は、第二次世界大戦中に兵士として北アフリカやフランスやイタリアに赴くことだった。子ども時代に残ったどんな物語も、戦争の恐怖のなかでは役に立たなかった。ばらばらになった人間や、銃弾でめちやくちやになった顔を目の当たりにした。大勢の友人が、父の腕の中で息を引き取った。なにより父を苦しめたのは、自分の手で人を殺したという記憶だった。

戦争が終わると故郷に戻り、結婚した。九カ月たたないうちに、長女のジョアンが生まれた。それからジョン、クレア、エディ、ナンシー、デイヴィッド、ジェフ、ステイヴンが生まれ、最後にわたしが生まれた。大志を抱いた青年は、いつしか九人の子どもを養う四十代の父親になり、妻は多発性硬化症を患って車椅子から離れられない体になった。

わたしが七歳のとき、母が死んだ。わたしは母のことをまったく覚えていない。父にはどうも、妻の死を人生の残酷なジョークだととらえているような節がある。しばらくは父も、家族がばらばらにならないように努力をしていた。大変だったと思う。わたしたちの宿題をみてくれて、読み聞かせをして寝かしつけてくれて、クリスマスや誕生日には盛大にお祝いをしてくれて、休暇にはかならず旅行に連れていってくれた。だが、年を取るにつれて色々な困難が重なってくると、父は疲れて恨みがましくなった。

母の死から数年のあいだ、父はわたしたちをあまり殴らなかったが、かわりに憎らしそうににらむことが多くなった。なにかというと、おまえたちにはがっかりだ、ほんとうにダメな子どもたちだ、と思いを知らせるのだった。わたしは一番年少だったので、きょうだいが出ていくたびに見送った。みんな、希望で胸をふくらませて巣立っていくのではなく、翼を切られた鳥のように、力なく旅立っていた。わたしとふたりきりになる頃には、父は子どもになにかを与えようとする努力をやめていた。わた

しはそのときはじめて、ぶたれるよりも、見下されるよりもつらいのは、無視されることだと知った。数日、時には数週間、父から一度も言葉をかけられないことがあった。わたしは戸惑った。だが、十五歳の子どもになにがわかっただろう。

めずらしく話しかけてきたと思うと、出てくる言葉は批判ばかりだった。おまえは夢をみすぎだ、と言う。そんなに高望みしてると、そのうち身を滅ぼすぞ、と。だが、当時のわたしにあったのは夢と希望だけで、それを守ろうと必死になっていた。こうしてはじまった父との対立は、それから数十年続くことになった。この戦いが、残りの人生を決定づけたと言ってもいい。

家を出たとき、自分がこの先なにをしたいのかわからなかった。わかつていたのは、ジャック・ライアンのようにはなりたくない、ということ。そして、きょうだいたちのような半端な人生は送りたくない、ということだった。誤解のないように言っておくと、兄も姉もいい人たちだ。ただ、彼らのように人生を諦めたくはなかった。そこでわたしは目標をみつけるための長い旅に出かけた。時々は無駄なことをしているような気になりながら、遊牧民族よろしく、学校から学校へとわたり歩き、つまらない職場を転々とした。自分がなにを探しているのか、よくわからなかった。ただ、いつかは、探し物はこれだったんだと気づく瞬間がくるにちがいない、という確信があった。恋愛も同じくらい行き当たりばったりだった。女性との付き合いになにかを求めていたが、それが手に入ることはなかった。ジャングルで蔓から蔓へと飛びうつるターザンのように、女性から女性へと飛びうつり、べつのだれかがみつかる、と、それまでの関係をあっさり終わらせた。やがて、アレクシスと出会った。彼女はインテリア・デザイナーで、愛と家庭のぬくもりを与えてくれた。だが、物事がどうみえるかを重視する彼女とちがって、わたしは、物事を自分がどう感じるかを重視した。ふたりで一緒にやれることは、ケンカくらいしかなかった。最終的にはうまくいかなかったが、アレクシスに連れられてニューベリーポートにくるまで、

付き合いは続いていた。別れたあとも、わたしはこの町に留まることにした。自分の知っているどんな場所ともちがっていたからだ。生まれてはじめて故郷にいるような気分になった。

放浪の十五年間、父と何年も話さないことが何度かあった。ふとした折に仲直りすることはあっても、いくらもたたないうちにまた関係が悪くなる。ところが、色々あったものの、傷つき、怒り、不満を爆発させたりするうちに、わたしは少しずつ、父親を思いやるようになり、愛するようにさえなっていた。心のどこかでは、父も父なりに精一杯のことをしてくれたのだとわかっていたのだ。とはいえ、わたしも父も変わることはなく、相変わらずケンカばかりしていた。

「アンダーボード」紙を立ちあげたのも、父との交流が途絶えていた時期だった。意外にも、数年後に再会してみると、父はわたしの新聞のことを少なからずよろこんでいた。もちろん、決して認めようとはしなかったが。父はよく、政治家に対する批判や賛成意見を地元紙の編集局に投書していた。小さい頃はそれを恥ずかしがっていた息子が、まさにそれを——新聞の編集と刊行を——仕事にして暮らしているとは知ったときの父の気持ちには、推して知るべしだ。

だが父は、わたしが「アンダーボード」紙をはじめた動機は理解していなかったと思う——まさか、レズビアンの上長の市長の名誉を守るためだったとは。父にしてみれば、弱者を守るのは大いに結構だが、それで生計を立てるのはまた別問題、というわけだ。

女性市長の再選から一年後、「アンダーボード」紙は生まれ、最初は無料だった。まもなく五十セントで買ってもらえるようになり、それが一ドルになり、最終的には一ドル五十セントで売れるようになった。慎ましい生活だが、なんとかやっている。収入源はニューススタンドでの売り上げと、購読予約金と、広告収入だ。時々、たまった請求書の支払いもできた。そろそろ辞め時かと考えていると、決まって町の連中が「アンダーボード」紙を廃業に追いこもうと画策しはじめ、わたしの反骨精神に火を

つける。彼らは、わたしの新聞に広告を載せている店で不買運動をし、わたしについての不名誉な噂を流した。小児性愛者、子どもの養育費を滞納している、妻に暴力をふるっている、詐欺師、等々。はじめのうちは、妙な噂が立つたびにびくびくしていた。だが、そのうち、一番の対抗策は、連中のことを一面に載せることだと気づいた。殺しの脅迫がはじまったのはその頃だ。匿名の脅迫状が、郵便で送られたり、車のフロントガラスに置かれたりした。車はしょっちゅうタイヤを切り裂かれ、地元の修理工場には、それに備えて換えのタイヤが常備されるようになった。排気管が発泡断熱材でふさがれていたこともある。

通報しなかったのは、犯人が警察官かもしれないという恐怖があったからだ。ニューベリーポートの警察は、むかしから批判的になっている。たいていの政治家は警察を恐れ、汚職があっても見て見ぬふりをする。わたしも警告されたことがある。警告したのは警察で影響力のある問題の多い人物だった。夜遅く、市役所の外で彼はこう言った。「気が進まんのはお互い様だが、停戦協定を結ばないか。あなたには手出しをしないでやるから、そっちもおれのことは放っておけ」

「こっちに手を出される理由なんかない」。わたしは、声の震えを隠して言った。

「手を出すのに理由はいらない。だいたい、叩いて埃の出ないやつなんかいるか?」。そう言うと、警官はウインクをして、おおまたで夜の闇の中に消えていった。

それからというもの、わたしは警察官のことを記事にしなくなった。その状態が一年半ほど続いたのだろうか。だが、報道すべきことが山のようにあるのだから、読者は当然ながら不審に思う。白状すると、わたしは怖かったのだ。町にはびこる悪党たちのなかで、警察官だけは追及せずにはいた。とうとう自分の意気地のなさを認め、腹をくくって警察に対する批判記事を書く、思っていたとおり、バットでスズメバチの巣をなぐったような騒ぎになった。情報を提供してくれたのは、日和見主義を嫌う数少ない

警官たちだった。わたしが新聞で警官の不祥事を次々に報じると、かつてないほどたくさんの部数が売れた。

読者に人気だったのは、自転車を盗んだことがバレた警官をからかう記事だ。もつとよろこばれたのは、署の備品として購入した新品のダイビングスーツが紛失した事件の記事だった。犯人の警察官は、悪事がばれると、自宅のプールのひびを修理するために借りていただけだ、と言い訳した。だが、残念ながら、ダイビングスーツがなくなったのは真冬だった。

やがて、臨時の「元帥」（警察署長のことをニューベリーポートではこう呼ぶ）が赴任してきて、乱れた警察署内の不正を正すことになった。ところが、少したつと町中の人間が、彼ではなんにも解決しないらしいことを思い知った。〈アーンダートード〉紙に彼の勤務時間表が載り、ゴルフをしていた時間も給料を受けとっていた事実が明らかにになったからだ。

一度、読者から総スカンを食ったことがある。勤務時間中に不倫をしていた警察官の名前を公表しなかったときだ。記事には、警官が女性と会っていた時間と場所までは載せた。名前を書かなかったのは、その警官に妻と学齢期の子どもがふたりいたからだ。家族にはなんの罪もない。だが、妻はいくつかの情報から、それが自分の夫のことだと気づき、結局は離婚した。

警察のことも報道しようと腹をくくると、彼らはほぼ毎号のように新聞に登場した。

地元の政治家を記事にするのも苦労が多いが、警察官との対立が始まると、生活のストレスレベルは急上昇した。コードレス電話は使わないようにと警告された。警察の人間がアパートのそばに車を停めて、無線で会話を傍受する危険があったのだ。通りを歩いているときも、身に覚えのない罪状でいきなり逮捕されるのではないかと、常におびえていた。だが、警察がやつきになつて粗探しをすると、屈し

てたまるかという決意はいよいよ固くなった。アイルランド人の血のせいかもしれない。

わたしに情報を流していると思われる警察官たちは、同僚たちからいやがらせを受けた。何人かは懲戒処分になった。告訴され、妻が四人目の子どもを身ごもっているというのに、あやうく刑務所に送られそうになった警官もいる。このときは運よく、裁判官が事件の本質に気づき、訴えを棄却した。

争いは激しくなるいっぽうだった。大勢の支援者がいたとはいえ、矢面に立つのはわたしひとりだ。用心のために、車にはかならず野球のバットを置いていた。時おり年配の友人たちが、真夜中に（アンダーボード）紙を配達するわたしの車に銃を持って同乗し、襲われたりしないように気を配ってくれた。社会の敵扱いされながらどうにか生き抜くことができたのは、連中があまり賢くなかったおかげだ。ピュリツァー賞を受賞した記者ジミー・ブレスリンの言葉を借りるなら、「まともに銃も撃てない連中」だった。なにか仕掛けてくるたびに、警察官たちはかならずヘマをした。さながらロード・ランナーを追い回すワイリー・コヨーテ「アメリカのアニメ『ルーニー・テューンズ』のキャラクター。鳥のロード・ランナーを生け捕りにしようと苦心していつも逃げられる」だ。住民たちが警察官の自滅ぶりを笑うことも少なくなかった。わたしは数え切れないほど交通違反切符を切られたが、どれも言いがかりとしか言えないものばかりだった。一度など、タイヤがすり減っていることを理由にチケットを切られた。チケットを切ったのは、斜視ぎみで、道路を逆走してきた警察官だった。ちやうど自動車保険が切れて、登録証が無効になる日のことだ。警察はわざわざ捜査網を張り、わたしを取り押さえたのだ。ある日の朝は、五、六人の警察官が、地元のレストランで長々と時間をかけて朝食をとっていた。目的はただひとつ、となりのテーブルにいるわたしを威嚇することだけだった。まさにそのとき、町の反対側では銀行強盗が起こっていた。ベーコンと卵とサンドイッチを食べるわたしをにらみつけるのに精を出したりしていなければ、悪党を逃さずにすんだだろう。あるとき、市役所での会議に、署に残った四人を除く警察官全員

が武装して乗りこんできて——まるで警察国家的一幕だ——、市会議員たちに手紙を手渡した。わたしとわたしの新聞に対する苦情を申し立てるものだ。制服を着て銃を腰につけた警察官が、三十人がかりで脅迫を試みようとする光景はテレビで放映され、そして、裏目に出た。住人たちは、汚職だらけの警察に対して声をあげはじめた。やがて、数百人の市民が、市役所の外にあるウィリアム・ロイド・ガリソン像の前に集まり、警察官たちの言動を批判した。市民たちがいきなり恐怖心を捨てたかのようにだった。しかたなく、当時の市長は、外部から専門家を雇って警察を調査させた。専門家の提出した報告書は、わたしが数年間書いてきた記事を裏づけたばかりか、地元の店主たちの不安にも触れていた。彼らは、〈アズター・トリブーン〉紙に広告を出しているせいで、警察が守ってくれないのではないかと心配していたのだ。

ゴミが盗まれたのは、そんな日々を送っていた頃だ。

市役所での会議から帰ってきたわたしは、アパートの前まできて、なにかがおかしいと気づいた。そして、はっとした。通りには、収集車がくる翌朝に備えてゴミ袋がいくつも出されている。だが、そのうちわたしのゴミだけがなくなっていた。おかしいとは思ったが、おかしいことが毎日のように起こるのがニューベリーポートという町だ。あまり深くは考えず、数人の友だちにそのことを話した。友人のひとりには警察官だった。

翌日の夜、ゴミを持ちさった犯人は警察官だったことが判明した。ふたりの刑事がゴミを漁り、わたしの秘密を探したらしい。詳しくはわからないが、わたしの名誉を傷つけるようなものを手に入れようとしたのだろう。ドラッグをやる道具や、児童ポルノや、もつと役に立ちそうなもの——たとえば、内部告発をしている裏切り者をつきとめるようなものを。大きな期待を裏切ることになって申し訳ないが、

わたしはただの太った中年男だ。みつかったのは、大量のトウインキーの包み紙、ビッグ・マックの空き箱、空になったアイスクリームの一パイント容器くらいだった。

警察官にゴミを調べられたくらいで、ここまでショックを受けるとは思ってもいなかった。なにが起こってもおかしくない、と肝に銘じていたはずだった。ニューベリーポートの政治について記事を書いたときからずっと、わたしの生活は常に混乱をきわめていたのだ。ところが、ゴミ盗難事件は、それまでのどんな嫌がらせよりもこたえた。最後の一線を踏みこえられたように感じた。わたしを守る義務がある者が、プライベートに土足で踏みこんできて、わたしを攻撃するための材料を探していた。それからの数日、わたしは異様におびえていた。悪いことはなにひとつしていないにもかかわらず、いまにも警察官が家に押しかけてきて連行されそうな気がしてならなかった。眠れなくなり、ノイローゼになりかけた。

限界が近づいていた。

二週間後、土地区画審判部で働くナンシー・ノイズという女性から、これといって警戒すべきでもないようなメールが届いた。アドレス帳の全員に一斉送信していた。犬の飼い主を探しているという。元々の飼い主が手放し、家族のひとりが引き取ったものの結局あまり世話ができず、次に預けられた別の家族には犬アレルギーがあった。そこでナンシーの出番となったらしい。彼女の頼みはシンプルだった。「だれか、マックスをもらってくれないかしら。年を取ったミニチュア・シュナウザーよ。このまま飼い主がみつからないと、保健所に連れていかれるかもしれない。でも、年を取っているから、もらい手がない可能性が高くて、そうなったら安楽死よ」

わたしはパソコンに向かい、〈アンダートード〉紙に無料で広告を載せて飼い主を募集するよ、と返信を書こうとした。ところが、いざキーを打とうとすると、心が揺れはじめた。むかしから、犬は大好き

きだ。いつかまた飼おうと思っていた。だが、いまはむりだ。タイミングが悪い。新聞で手一杯だし、なによりこのアパートはペットを禁止している。ミニチュア・シュナウザーがどんな犬かは知らないが、かん高い声で吠える小型犬にちがいない。老婦人が飼っていて、手編みのセーターなんかを着せられているようなあれだ。どうせ飼うなら、もつとちゃんとした犬がほしい。そう、黒いラブラドルレトリバーだ。男が飼うべきなのは、ああいう犬だ——かつこよくて、堂々としていて、たくましく、忠実。いままで飼った犬のなかで一番のお気に入りは、シェーマスという黒いラブラドルだった。だから、飼い方も心得ている。

ふと、なにかで読んだアドバイスが頭に浮かんだ。異性と付き合うのがむずかしいと感じるときは、しばらくひとりになったほうがいいらしい（ここだけの話だが、当時のわたしは確かにひとりになったほうがよかった。元々、女性と深く付き合うのは苦手だ。さらに困ったことに、自分以上に不器用な女性を選んでしまうくせがある）。時間を置いて、まずは植物を育てることからはじめてみる。植物で成功したら、次はペットを飼ってみる。ペットもうまくいったら、恋人探しを再開するのだ。わたしは、窓辺でゴミと化しつつある植物をちらっとみた。そしてなぜか、ハイにでもなったかのように、こんな返信を打ちはじめた。「ほかにもらい手がないなら、ぼくが飼います」。送信ボタンを押したあと、ようやく正気に戻った。たちまち後悔の念が押しよせ、いまのは間違いだとナンシーに知らせようかと考えた。だが、大勢にメールを送ったのなら、ほかにひとりくらい捨て犬に手を差しのべる人間はいるはずだ。

ところが、ナンシーから届いた返信にはこう書いてあった。「トム、ありがとう！　ほっとしたわ。きつと楽しくなると思う」

いったい、なにをやっているのだろう。犬を引き取るような優しい人間はほかにいなかったのだろう

か。おかげでこの様だ。

犬を飼うのは責任が伴う。わたしは責任なんかほしくなかった。人生が混乱状態で、ペットを飼う余裕はない。しばらく、申し出を撤回する方法がないか、あれこれ思案してみた。そのあいだ、ネットでミニチュア・シュナウザーの画像を検索した。

最悪だ。思ったとおりの小型犬だった。

翌日の午後、マックスを受け渡す準備が整ったという連絡がきた。

こんなにすぐに？　まさか、無理だ。こつちの準備はまだできていない。大家の許可も取っていないし（ペットは禁止だという話はしたっけ？）、心の準備もできていないし、部屋を犬用に整える準備もしていない。今日はいけないと連絡すると、明日の午後に迎えにいつてほしい、と言われた。ペットシヨップのトリマーが預かっているらしい。シャンプーはすんだがカットはしていない、ということだった。

わたしは、リードも首輪も予備知識もなしで、ペットシヨップへ犬を迎えにいった。トリマーの女性が出てくるのを待つあいだ、店内をまわってケージをひとつずつのぞき、心の中でつぶやいた。あの犬はなかなかいいぞ、いや、あっちの子もいい。ミニチュア・シュナウザーらしき犬はどこにも見当たらない。心に希望の光がさす——かわいい犬ばかりだし、魅力を感じない犬は一匹しかいない。みすぼらしい犬で、オスカメスカもわからない。性別がわからないどころか、そもそも犬にもみえない。毛を刈らずに放置されたヒツジみたいだ。ほかの犬はわたしがケージに近づくと顔をあげたが、その灰色のヒツジはぴくりとも動かなかった。どうしてもよさそうに寝そべり、耳もきこえず、口もきけず、目もみえないようだった。かわいそうに。わたしは思った。こんな犬の飼い主は、さぞ哀れなやつなんだろう。ぼさぼさ髪のたるそうな中年男の姿が目に見えかぶ。

すぐに、トリマーが現れた。がっしりした女性で、あわただしく入ってきたところを見ると、問題の

犬をできるだけ早く厄介払いしたいらしい。世間話をしたあと、わたしはたずねた。「マックスは別の部屋にいるんですか？」

「いいえ、そこにいるわ」女性は言った。

うしろを振りかえる。女性が指さした先には、例のヒツジがいた。

逃げだしたい衝動に駆られたが、女性はすでにケージの掛け金に手をかけている。毛のかたまりが、おぼつかない足取りで外に出てきて、こちらを向く。思わず一步後ずさる。いつ逃げだそう？ ヒツジが迫ってくる。

トリマーの女性は、有無を言わずわたしたちを出口に連れていった。まだ準備ができていない、というわたしの訴えには耳を貸さなかった。「リードもないし、首輪もまだ……」

「だいじょうぶ」と言いおえるのと同時に、女性はばたんとドアを閉めて鍵をかけた。わたしは、停めてある車に歩いていった。ヒツジがうしろをついてくる。

一度だけ、ブラインドデートをしたことがある。一度きりだったといえ、デートの顛末は想像してもらえると思う。わたしは助手席のドアを開けてマックスを車に乗せながら、何年も前のブラインドデートのときとまったく同じ感情に襲われていた。後悔だ。どちらのときも、同じことを願った。デート相手のときも犬のときも、車に乗らないでくれたらいいのに、と。ところが、デート相手も犬も、よろこんで車に乗りこんだ。わたしは打ちひしがれた。

アパートへ向かって車を走らせながら、わたしはちらちらマックスをみて様子をたしかめた。マックスは静かに座り、目にかかった灰色の毛のむこうからわたしをみている。初日はこれの繰り返しだった。黙って座って相手をみて、どれくらい長い時間を過ごしただろう。ふたりとも、考えていたのは同じことだったはずだ。なんでこうなった？

その夜はパーティーに出かける予定だったが、ヒツジをひとりで置いていきたくなかったので、クレイ夫妻にきてもらった。八十歳のダグとバーバラは年の離れたわたしの友人で、飼い犬を亡くして寂しがっていた。出かけていたのはほんの二時間だったというのに、帰ってみると、のっそりしたヒツジではなく、うれしそうな犬が出迎えてくれた。バーバラによれば、わたしが家を出たあと、マックスはドアの前に陣取り、頑として離れようとしなかったらしい。玄関に座り、わたしの帰りを待ちつづけたのだ。ぼくらは家族なんだと言わんばかりに。どうしたわけか、出会ったその日のうちに、だれも欲しがらなかったヒツジと、責任を負うことをこわがっていた男のあいだには、絆のようなものが生まれていた。さえない老犬「マックス」はみごとに変身した。トリミングをしてもらって、ようやく犬らしくみえるようになった。それから、名前も変えた。新しい正式な名前はマックスウェル・ガリソン・ギリスだ。マックスはありきたりすぎたので、本名はマックスウェルにした。ミドルネームとファミリーネームは、それぞれウィリアム・ロイド・ガリソンと、ボッシー・ギリスからもらった。インディペンデント系の新聞を立ちあげたばかりの自分が飼う犬には、ふたりの先達から名前をもらうのが一番だと思ったのだ。すぐに、マックスは町の人たちに覚えられ、名前を呼んで声をかけてもらえるようになった。大家の男性も、「今回だけだぞ」と言つて、ペットを飼うことを許してくれたばかりか、時々こっそりおやつをくれた。

アパートで仕事をしているわたしは、部屋の玄関側で一日の大部分を過ごす。机に向かっているか、ソファで眠っているかどちらかだ。マックスは、簡易キッチンを寢床に選んだ。なだめてもすかしても、わたしのいる部屋で過ごそうとはしなかった。その習慣は決して変わらなかった。そばにくるのは、外にいききたいとねだるときだけだった。

だが、いったんアパートを出ると、話はまったく違った。わたしたちはつねに一緒だった。マック

スウェル・G・ギリスは、個性的な人々と同じようにダウンタウンの常連になった。新聞の読者たちは、一番人気のあるわたしのコラムでマックスの存在を知った。〈父への手紙〉というそのコラムは、父親に送る手紙という形式で書いている。マックスは、しょっちゅうそこに登場した。わたしが〈アンダー・トード〉紙を夜中に配達するときは一緒にきて、たくさん購読者が用意してくれていたおやつをみると目を輝かせた。市役所の会議にもいつも顔を出し、市長の就任式にまで出席した。リードをつけずにわたしのとなりを歩くようになり、あちこちの店に入ってはおやつをもらった。

ようやくマックスは、犬にふさわしい暮らしを送れるようになったのだ。だが、残念ながら、その暮らしは長く続かなかった。

一緒に暮らしはじめて一年半がたとうとしていた頃、いきなりマックスが発作を起こすようになった。獣医のジョン・グリロは、悲しげに肩をすくめて言った。「もう年だ」それをきいてわたしは、マックスはもう長くないのだと悟った。そして、終わりは思っていた以上に早く訪れた。

二日後、マックスがとくに激しい発作に襲われるのをみて、明日になったらグリロ先生のもとに連れていこう、と決心した。その夜わたしは、マックスウエル・G・ギリスを連れて、カフェ・デイ・シエナへいった。市役所の職員や、実業家や、数少ない善良な警察官たちが、カフェに立ちよつては、マックスに声をかけてくれる。代わるがわるそばにきてくれた人たちは、ほとんどが目に涙を浮かべ、これが最後だとマックスの頭をなでていった。

その夜も、マックスはこれまでと変わらずソファにこようとしなかった。わたしは寝具を持ってキッチンへいき、マックスの寝床のとなりで横になった。だれにも欲しがられなかった小さな犬に、最後の夜をひとりで過ごさせるわけにはいかない。わたしは体を寄せて丸くなった。マックスの弱々しい心臓の鼓動や、息を吸うたびに上下する体の動きが伝わってくる。ようやく愛されることを知った犬は、丸

めた背中をわたしの胸に押しつけていた。眠りに落ちる直前、最後にわたしがきいたのは、マックスの満足そうなため息だった。

翌朝わたしたちは、眠りに落ちたときと同じくらい穏やかに目を覚ました。少しのあいだマックスは元気そうで、病気がウソのようだった。希望が湧いてきた、と思った瞬間、発作がはじまった。マックスは体を痙攣させ、疲れきって倒れこんだ。すぐに二度目の発作が襲ってきた。そして、三度目。わたしはグリロ先生の病院に電話をした。

最後の日、わたしたちはもう一度町をめぐり、店主たちはマックスにさよならを言った。ヒツジのようには決してみえない、立派な名前がある犬に。みんなが悲しんでくれた。わたしはそれ以上につらかった。町の人たちに別れを告げると、マックスを車の助手席に乗せた。マックスは、出会った日と同じように、当たり前のように座った。だが、今回はあのとときとはちがう。少なくとも、わたしにとってはちがっていた。マックスは、出会った瞬間から、いつも居心地よさそうにしていた。わたしの人生における自分の存在意義を信じてうたがわず、自分が飼い主を必要としている以上に、この飼い主には自分が必要なのだと心得ているようだった。出会った当初は、進展が望めそうにないデート相手と一緒にいるような気分だったというのに、このとき、わたしはマックスにさよならを言いたくなかった。

最後のドライブでは、ニューベリーポートをまわった。モーズリー州立公園から、プラムアイランドまで車を走らせる。マックスは、プラムアイランドの浜辺を駆けまわるのが大好きだった。助手席のマックスは、フロントガラスのむこうを流れるニューベリーポートの景色を眺めている。病院まであと一キロほどになったとき、カーラジオからケニー・ロギンスの「ホエンエバー・アイ・コール・ユー・フレンド」が流れた。わたしは必死に平静を保とうとした。わたしが最も友だちを必要としていたときに、友だちでいてくれた犬のために。

マックスウエル・G・ギリスは、わたしに抱かれたまま注射を二本打たれた。魂がその体を離れていくと、マックスは、金属の台の上でくたつとなった。魂が解放されて自由になり、本来あるべき姿に戻ったように思えた。わたしは、どうしてもマックスを置きざりにできず、命の尽きた体を抱えて、長いあいだその場に立ちつくしていた。

それから二日間は、ほとんど部屋から出なかった。思いきって外に出たのは夜も更けた頃で、あたりには人気がなかった。マックスがおやつをもらっていた商店街に差しかかったとき、わたしははっとした。あたりの店の窓には紙が貼られ、そこにはマックスウエル・ガリソン・ギリスの死を悼む言葉が綴られていたのだ。

「今日、ニューベリポートはすばらしい犬を失った。

マックスウエル・ガリソン・ギリス、わたしたちは決してきみを忘れない。

きみがいたとき、ここはたのしい町だった。」

よくみると、貼り紙のしてある店は、数軒ではなかった。もっともっとたくさんあった。

それから数日、郵便局の私書箱には、五十通をこえるお悔やみのカードが届いた。知らない人からのカードまであった。送り主たちは、町でマックスをみかけることがなくなつてとても寂しい、と伝えてくれた。

だれにも欲しがってもらえなかった犬は、わたしだけではなく、だれからも愛される犬になった。息を引き取るときには、わたしに会うまで縁のなかった尊厳と愛を手に入れていた。

一緒に過ごしていたあいだ、マックスは家庭を手に入れ、そして、わたしにも家庭を与えてくれた。思いがけない贈り物だった。マックスを引き取ったときにはまだ、わたしは、自分自身を救う一步を踏みだしたことに気づいていなかった。

『ピーター・パン』の作者ジェームズ・M・バリーは、かつてこう書いた。「この世で大切なものはほんの少ししかないが、人は失ってはじめてそのことに気づく」。友だちを亡くしたとき、わたしが気づいたのは、まさにそのことだった。マックスとの出会いと別れは、わたしに大切なことを思いださせてくれた。この世界は、自分が新聞に書いているような汚職や不正ばかりではない、と。

こうしてマックスウェル・ガリソン・ギリスが新しい扉を開いてくれ、そこから、アティカス・マックスウェル・フィンチが入ってくるようになった。

2. 「ずっといくときも連れていきなさい」



子犬を育てるにあたって知っておくべき大事なことを教えてくれたのは、本でも教室でもなく、受話器越しにきこえてくる、南部訛りのあるかすれた声だった。声の主は、アティカスのブリーダーのペイジ・フォスターだ。ペイジはこんな忠告をくれた——犬と一緒に暮らしはじめて最初のひと月は、どこへいくときも連れていきなさい、と。わたしは、ひと月をふた月に延長した。

ペイジは続けて言った。「その期間はだれにも抱っこさせないで。自分が家族だって教えてあげなくちゃ。そうやって絆を作っていくの」

ペイジにはほんとうに感謝している。彼女から子犬を買ったおかげで、たくさんの知恵を借りることができた。何度電話をかけたかわからない——はじめの頃の電話攻撃は、ペイジの予想よりはるかに多かったにちがいない。しかも、受話器を手にしたわたしは、たいていパニックになっていた。わたしはペイジのやり方が好きだった。理屈よりも直感を信用し、素朴な神秘主義を交えながら、ごくまっとうなアドバイスをしてくれる。決まって長くなる電話を通じて、ペイジという女性は直感の人なのだと知るようになり、彼女の言うことすべてを信頼するようになった。ペイジの忠告に従ったおかげで、わたしとアティカスは犬の訓練学校にはいかずにすんだ。その後の数年で出会ったたくさんの自称犬専門家

は、さぞ残念に思ったはずだ。

いつだったか、公園のベンチでリードも首輪もつけずにわたしと座っているアティカスをみて、犬専門家の女性が、アティカスの行儀のよさに驚いたことがある。やけに厳しい話し方をするので、わたしは思わず、お座りを命じられた犬のように背すじが伸びた。彼女は、どんな訓練をしているのかとたずね、こっちがひるみそうな小難しい言葉を次々と並べた。ドイツ語かなにかにしかきこえなかったが、真剣な犬専門家たちのあいだには派閥らしきものがあるらしいことは理解できた。

わたしは肩をすくめた。「いや、とくに訓練はしていません。一緒に暮らしているだけです」

女性は腑に落ちないようだった。最終的に、この男は田舎者なのだと判定を下したらしく、哀れみと非難の入りまじった目でわたしをみると、おおまたで歩き去った。ワーグナーのCDを買い取るレコード店でも探しにいったのだろう。

覚えているかぎり、アティカスをみた人はきまっつて、おとなしいですね、と言つて、かならずと言つていいほど、お手をさせようとした。だが、アティカスはお手をしない。相手をまっすぐにみるだけで、首を傾げることさえしない。

それをみた相手は、またお手をさせようとする。アティカスはまた、相手の顔をしげしげとみつめる。このあとには、だいたいお決まりの会話が続いた。

「この子、お手はできる？」

「さあ、させたことがないんで」

「教えなかったの？」

「ええ、なにも教えてません」

芸を教えてなんになるだろう。わたしと同様、アティカスにも自分らしく生きてほしい。基本的なこ

とを学んで、安全に楽しく生きてほしい。これまでたくさんの人に、飼い主と犬は、芸を教えたり学んだりするなかで関係性を築いていくのだ、と言われた。犬は、指示されたとおりにするのもご褒美をもらうのもうれしいんだ、と説明された。反論するつもりはないが、わたしたちの関係性はちがうのだ。アティカスが周囲になじみ、だれかに迷惑をかけたり、厄介ごとに巻きこまれたりしなければそれでいい。どんな犬になるのか決めるのはわたしではなく、アティカスだ。リードをつけずに一緒に歩くことができて、公共の場でもくつろいで、どこにいつても堂々と振る舞ってくれれば、それで十分だ。手首からひじまでの大きさしかない子犬を抱いて、二カ月過ぎた。いつも、タッチダウンしようとフットボールを抱えている気分だった。二カ月抱きつづけたことがふたりの関係を作り、これから先何年ものことを決定したのだ。

ページ・フォスターとは、インターネットを通じて出会った。わたしは、マックスウェル・G・ギリスのあとを継ぐ子犬を探すべく、希望する犬の条件をデータベースに登録していた。マックスのすばらしさを知ったわたしは、またミニチュア・シュナウザーを飼いたかった。

アメリカ中のブリーダーが、それを読んで、メールを次々に送ってきた。どのメールにも、生まれて五週から八週のミニチュア・シュナウザーの写真が添付されていて、いつ受け渡しができるか書かれていた。ところが、どの犬をみてもぴんとこなかった。どの犬も完ぺきなポーズを取り、あまりにも非の打ちどころがなくて堂々としていた。どことなく、オモチャの子犬のようだった。いや、両親がけばけばしい化粧をして美少女コンテストに出場させる、あわれな少女たちにも似ている。子犬らしくないのだ。なにより気になったのは、いまは亡き最愛のマックスウェル・G・ギリスに少しも似ていないことだった。あの犬こそ理想だった。マックスは、わたしと同じでどうみても上品とは言えなかったが、ご

まかしがなく、そこがすばらしかった。

なぜだったかは忘れたが、メールを送ってきたブリーダーのなかで、わたしがやり取りをはじめたのはページひとりだった。彼女が送ってきた子犬の写真をみて、わたしはこう返信した。「どうもぴんときないんです」さらに送られてきた写真にも、同じ言葉を返信した。

とうとう、ページはたずねた。「どういう犬を探しているのか教えて」

そこでわたしは、マックスの話をした。彼の性格のこと、わたしたちが分かち合っていたもののことを、かなり踏みこんで伝えた。メールの文面は思い出せないが、一緒にいたくなる犬がいい、と送ったことだけは覚えている。浜辺や、町の広場のベンチや、路上のカフェで並んで座り、移りかわる世界と一緒に眺めていられる犬がよかった。探していたのは、思慮深い犬だった。アスリートより哲学者がよい。自立した精神の持ち主であってほしかったが、独立心旺盛なあまり、頑固だったり扱いに困ったりするのにも困る。わたしは友だちを探していた。

ページの返信には、責任は取れないけど、という前置きが付いていた。あと一匹だけいるが、その犬はあまりに「変わって」いたので、いままで育てた子犬とちがって手元に置いておくつもりだったようだ。送られてきた数枚の写真に写っていた子犬は、それまでみてきた完ぺきな子犬たちとはちがっていた。背すじを伸ばして座ってもいないし、カメラにむかって気取ったポーズを取ってもいない。腹ばいになり、気だるそうに片方の前足にあごをのせ、横目でこちらをみている。さっさと終わらせようよ、とため息まじりに言っているかのようだ。注目されるのがうつとうしいと言わんばかりだ。

銀色の毛のマックスとは少しも似ていない。全身が黒く、足の先と、鼻と、胸とお尻は白い。なににより目を惹かれたのは、ぼさぼさの真っ白な眉だ。そのせいで、年老いた漁師のようにみえた。

こうして話はまとまった。わたしは、ほかの犬と似ていない子犬を選んだのだ。たぶん、自分に似て

不器用そうなところに惹かれたのだと思う。一緒に生まれたきょうだいがいないということも、魅力として映った。彼は世界でひとりきりで、わたしもまた、まったく同じように感じていた。

ペイジが最初にくれた、どこにいくときもアティカスを連れていくように、というアドバイスはいろんな意味で役に立った。絆を作ってくれたし、おかげでアティカスはわたしを信頼してくれるようになった。そしてわたしのほうには、思ってもみない感情が芽生えることになった。ほんとうは、こんなにすぐ新しい犬に乗り換えるなんて薄情じゃないか、という罪悪感を抱いていたのだ。次の犬を飼うことなど決してないだろうと思っていたくせに、マックスの死から数週間後、わたしの腕の中では子犬が呼吸をしている。小さく、弱々しく、わたしを必要としている。そして、いくらもたたないうちに、自分もこの犬を必要としているのだと悟った。

ペイジのアドバイスは、変わり者の子犬と傷心の孤独な男にはぴったりだった。男と犬は、出会ったその日から親しくなった。だが、マックスを偲ぶ時間も必要だった。空港でアティカスを引き取ったあと、わたしは真っ先にプラムアイランドへ向かった。アティカスを抱いて渚にいくと、ポケットから小さなビニール袋を取りだし、マックスの遺灰を白い波の上にまいた。

最初の一週間は、なにもかもうまくいった。すべてのことが、ペイジの話したとおりに運んだ。不満はなにひとつなかった。事件が起こったのは肌寒い春の朝。わたしはアティカスを車に残して毎週恒例の土曜日の朝食会に出ていた。席のそばの窓にハッチバックを寄せて停め、リアガラスからアティカスを見守れるようにしておいた。アティカスは後部座席に積んでいた箱をよじのぼり、後部座席とリアガラスのあいだのパネルの上にあがった。出会って二週間が過ぎていたが、離れたのはこれがはじめてだ。だが、パネルの上にいれば、むこうにもわたしがみえる。

朝食の雰囲気はいつもどおりだった。互いに冗談を飛ばしあい、それぞれの近況を報告し、ティーポ

ットのように小さな町を賑わせる政治的ゴシップで盛り上がる。いつも、次の〈アンダートード〉紙にぴったりのネタを仕入れることができた。メンバーは、この町にすっかり根を張っている友人たちばかりで、町の事情にかなり詳しかった。ここで彼らから話をきき、次の一週間で情報の裏を取る。そして、彼らの話はかならず正しかった。よそものにしてみれば、この朝食会は、ニューベリーポートの内幕を垣間見る場だったのだ。

楽しくしゃべっていると、ふいに、仲間のひとりがわたしをつついて窓の外を指さした。たくましい赤ら顔の男で、日中は地元の水道局で働き、夜は飲んだくれている友人だ。みると、アティカスは変わらず後部座席の上のパネルにいたが、リアガラスの内側でこちらに尻を向けていた。足を踏んばり、肩ごしにわたしをみている。

「あの犬、なにしてるんだ？」

「クソだ」別の友人が声をあげた。

そのとおりだった。アティカスはわたしの目をまっすぐにみながら、糞くんをしていた。

友人たちは、口々に称賛の声をあげた。人生を楽しむには根性をみせるべし、という信条を持った彼らは、アティカスのやったことに大喜びしていた。この一件以来、アティカスは彼らの仲間として敬意を払われ、マックスの後継者として認められることになった。彼らはマックスのことが大好きで、永遠の眠りにつく前の晩にも、カフェの「お別れ会」に足を運んでくれたのだ。

アティカスの悪行は、まだ終わっていないなかった。すつと立ちあがると、わたしたちに向きなおり、前足を使って糞をあたりに塗りつけはじめた。わたしは外に飛びだし、車に駆けよった。だが、手遅れだった。後部座席も窓も、ひとクラス分の幼稚園児が泥でフィンガーペイントをしたような有様になっていた。

子犬のウンチほどくさいものはない。窓を全開にして家まで運転したが、たいして効果はなかった。そのあいだ、三キロの小さなモンスターは悠々と助手席に座っていた。のんきな顔で、おだやかに窓の外を眺めていた。

二日後、事件はふたたび起こった。わたしは部屋に子犬を残して友人と昼食をとりいき、一時間後に戻った。ドアを開ける前から、あの悪臭が鼻をついた。小さなピカソは、玄関の白い壁一面をキャンバスにして、芸術的な絵を描いていたのだ。

わたしはパニックを起こしてページに電話をかけた。

ページは笑いながら、母音を引きのばす南部の話し方でしゃべった。「アティカスは、約束とちがうじゃないか、って言うてるのよ。一日目から片時も離れなかったのに、急にひとりにされたでしょう。それが気に入らないの」

わたしは腹を立てていたが、ページはおもしろがっていた。

「どうすればいい？ やめさせるには？」

するとページは、アティカスがあまり動きまわれない小さなケージを用意して、そばを離れるときは中に入れなさい、と言った。

「ウンチはしないはずよ。犬は自分の居場所を汚すのがきらいだから」

翌日、わたしは真新しいケージにアティカスを入れて、ランチに出かけた。戻ってみると、おなじみの悪臭がただよってきた。真剣な瞳がふたつ、ケージの中からこちらを見上げている。全身がチョコレートキャラメルのような茶色になっていた。小さなケージの中で糞をしたばかりか、その上で転げまわったらしい。

わたしは、片手で子犬をすくいあげ、バスタブに直行した。もう片方の手で鼻をつまむ。茶色い水が

渦をえがいて排水口へ吸いこまれるのをみながら、湯で子犬の体を洗った。やがて、チョコレートキメラメルの子犬は、もとのアティカスに戻った。

ふたたび、ページに電話をかけた。「ケージを使ってもだめだった！　クソをして、その上で転げまわったんだ！」

はじめの数週間で、ページは何度大笑いしたことか。どたばた劇をおもしろがっていたが、内心では、わたしが懸命に子犬を育てていることを喜んでくれていたようだ。電話口のわたしがパニックを起こしていようと、苛立っていようと、怒っていようと、いつもページは、愉快そうに笑いながら答えてくれた。わたしは遠く離れた北部の町から、ページをずいぶん楽しませていたようだ。

「アティカスは、自分の意思を伝えているのよ。明日も同じことをしてみて。留守番中にこんなことしちゃダメだって伝えるの。決定権はあなたにあるんだ、って。心配しないで、あなたたちは大丈夫」

翌日、わたしはアティカスをケージに入れながら、この攻防戦に決着をつけよう、と心に決めた。一時間後に戻してみると、同じ結果が待っていた。ケージを開けると、小さなチョコレートキメラメルが、まっすぐにわたしをみた。うれしそうでも悲しそうでもない、静かな表情だった。

バスタブに連れていき、糞まみれの子犬を洗った。ページには電話をかけなかった。自分は、汚職警察官や腐敗した政治家たちを、新聞で公然と非難してきた男だ。匿名の脅しにも、犯人がほぼ特定できる脅しにも、屈しなかった。わたしはタフな男だ。それが三キロの子犬に手を焼いている。冗談じゃない。わたしは、別の方法を試すことにした。

こんな場面を想像してほしい。当時のわたしは、体重がアティカスのほぼ五十倍あった。その大男がバスタブのふちに座り、ずぶぬれの子犬の胴をつかんでいる。前足が、湯の上でぶらぶら揺れている。大男は子犬の目をまっすぐにみて、こんこんと言い聞かせている。この暮らしに慣れなくてはいけな

こと。ほぼずっと一緒にいられること。それでも、時には、アパートや車で留守番をしなくてはならぬ日もあること。アティカスは、目をそらさなかつた。恥ずかしそうでもなく、反抗的でもなかつた。話しているわたしを、じつと観察しているようだった。

「よくきいてくれ。お互いに歩みよろう——出掛けるときもケージに入れたりしない。だから、糞をまき散らすのはやめるって約束してくれ。出掛けても、すぐに戻ってくる。かならず戻ってくる」

翌日、わたしは外出した。玄関に座ったアティカスのそばに、犬用ビスケットをひとつ置いた。鍵を閉めながら、きゅうきゅう鳴く声やかん高い吠え声をきくまいとした。そして、ドアを背にして歩きはじめた。戻ってみると、アティカスはまったく同じ場所に座っていて、ビスケットには口をつけていなかった。ドアを開けるなり飛びついてきて、うしろ足で立ちながら前足をわたしのひざのあたりに掛けた。顔を輝かせ、わたしがほんとうに戻ってきたことに大喜びしていた。悪臭はしなかつた。それから、いつも同じだった。わたしひとりで出掛けるときは、かならずビスケットをひとつ置いていく。アティカスは行儀よく待ち、戻ると大はしやぎで出迎えてくれる。わたしが戻ったのを確認して、初めてビスケットに飛びかかる。追いつめた獲物に襲いかかるように。

こうして、わが家に緊張緩和が訪れた。ページの言うとおりに——わたしたちは大丈夫だったのだ。

ページには、少し時間を置いて電話をかけた。アティカスのウンチ攻撃をやめさせたことを、できるだけさりげない感じで報告したかったからだ。ところが、彼女の声をきいたとたん、わたしはがまんできずに、事の顛末を洗いざらい説明した。ページは笑って笑って大笑いし、やがて言った。「あの子は……ただものじゃないわね」

ケージを使うというアドバイスはうまくいかなかったものの、ページの言うことはほぼすべて正しかった。なかでも、初めのひと月はアティカスを連れてあるきなさい、という助言は、目覚ましい効果を

発揮した。

ミニチュア・シュナウザーを飼ったことがあれば、どれだけ強情な犬かはわかってもらえると思う。だが、わたしたちの場合、その問題は乗りこえられた。たぶん、どこへいくにもアティカスを連れていったおかげだと思う。なにかを強要することをほとんどしない育て方も、よかったのかもしれない。決まりは、重要なものだけ。基本的なルールだ。危険さえなければ、やりたいようにやらせた。ただし、わたしの物を壊したりしない、人に迷惑をかけない、という条件付きだ。

お座りと言うと座るが、座る場所はどこでもいい。伏せと言うと伏せるが、伏せる場所は好きに決めていい。それでうまくいっていた。わたしは、アティカスの主人にはなりたくなかった。身を守るためのルールさえ教えられれば、それで十分だ。

すべてにおいて正しいページでも、もうひとつだけ間違っていたことがあった。アティカスを連れて行動する一カ月目から、ハーネスとリードをつけるようにアドバイスされていたのだ。ハーネスとリードをつけると外に出られると考えるので、どちらにもいい印象を持つようになる、というわけだった。ところが、初めからアティカスは、ハーネスもリードも大嫌いだった。ハーネスをつけたり、首が十分に強くなってからは首輪をはめたりすると、そのたびに体をこわばらせた。外に出て、ハーネスとリードをつけて地面におろす。とたんにアティカスは、きつかり三步あらずさり、自分はひとりで大丈夫だ、ひもなんかまっぴらだ、と訴えるのだった。

やがて折衷案が生まれた。リードはつけるが、地面に落とすし、一緒に並んで歩くことにしたのだ。小さな子犬が自分のリードを引きずりながらレンガの舗道を歩く姿は滑稽だった。だが、わたしはアティカスの意思を尊重し、必要なときだけリードを拾いあげた。

アティカスは、すぐにニューベリーポートになじんだ。町の人たちは、マックスのときと同じように

アティカスのことを知った。はじめは〈父への手紙〉というコラムで存在を知り、それから、実際に町でその姿をみた。アティカスが町にきたことはマックスの死を伝えた新聞の次の号で知らせてあったので、みんなが会うのを楽しみにしてくれていた。初めの数日は、どこへいってもたくさんの人たちが、車でそばを通りながらクラクションを鳴らして挨拶してくれたり、窓から「ようこそ、アティカス！」と声をかけてくれたりした。店の主人たちはマックスウェルが死んだとき、目に涙を浮かべて別れを告げ、ショーウィンドウに弔いの言葉を貼ってくれた。数週間後のいま、彼らは、心からアティカスを歓迎してくれた。

実際それは、圧倒されてしまうほどの歓迎ぶりだった。玄関の前には子犬への贈り物が数え切れないほど置かれ、どこへいってもニューベリーのポートの新顔は声をかけられた。アティカスは、みんなが自分の名前を知っていることを当然だと考えながら育った。新しい町にやってきた子犬にとっては楽しい日々が続いた。いく先々で、みんなが彼に会いたがった。可愛い子犬はみんな同じような経験をするのだろう。だが、アティカスの場合は、少し特別だった——彼をひと目みるためだけに、みんながわざわざ足を延ばしてやってくるのだ。車で町にきたり、通りを渡ってきたり、建物から走りだしてきたり。そばにくるとかならず、アティカス、と名前を呼んでくれた。町の人たちは、〈アンダートード〉紙のコラムを通じて、マックスがいかにわたしの人生を大きく変えたか知っていた。そして、マックスを身近に感じてくれていた。だから、その後継者となったアティカスを歓迎してくれたのだ。

アティカスを抱っこしたいという頼みを断るのはつらかった。ページにされた忠告を説明すると、残念そうな顔をしたが、わかってくれた。みんなが代わるがわる、わたしの腕におさまったアティカスをなでた。子犬に触れた彼らの目は、純粋なよろこびに輝いていた（荒っぽくたくましい男たちでさえ例外ではなかった）。生まれたばかりの人間の赤ん坊を相手にしているようだった。何人かは、アティカ

スにこう言った。「マックスウエル・G・ギリスに会ってたら、きっと大好きになってたよ」

アティカスが居心地の悪さを感じるような場所はどこにもなかった。少し大きくなると、通りに並んだ店にひとりで出入りして、ビスケットをもらってくるようになった。そのあいだ、わたしは外で待っていた——マックスのときと同じように。わたしは、アティカスの独立心を愛していた。

新聞の読者のひとりに、なぜ自分と同じ姓のアティカス・M・ライアンではなく、アティカス・M・フィンチと名付けたのかたずねられたことがある。わたしはその女性に、アティカスには自分らしくいてほしいからだ、と説明した。わたしたちはチームだが、大切なのは、アティカスが単なるわたしのペットとしてではなく、自分らしく生きることだ。犬をアクセサリーとして扱いたくない。呼吸をし、様々なことを感じる独立した生き物として、人生を共にしてほしい。別のラストネームを付けたのも、そのためだ。ささやかで無意味なことにみえたとしても、わたしには大切なことだった。ページにこの話をすると、彼女はうれしそうにため息をつき、感謝してくれた。「犬になにより必要なのは、自分らしくいることよ」

町にきた頃から、アティカスはわたしと一緒に市役所に出入りしていた。最初は、問題だらけで頭の悪い市長の取材だった。すぐに引退しそうだと思っていたら、実際そのとおりになった（退任の大きな理由は、縁故主義と、警察のひとりに対する脅迫が発覚したことだったが、そもそも市長としての資質に欠けていた）。市長は、わたしとアティカスが控え室でそれぞれの椅子に座り、週の会議がはじまるのを待っている姿を見ると、決まって言葉に詰まった。だが、彼の秘書や部下は、言うべきことを心得ていた。彼らは、町の人たちと同じように、名前を呼んでアティカスに挨拶し、市長にこう告げるのだった。「市長、ミスター・ライアンとミスター・フィンチがいらしています」

次の選挙では、女性が新しい市長に就任した。前職よりましだったとはいえ、彼女も長くは続かなか

った（教師とやり取りしていた卑猥なメールがみつかったことが、辞任の決定打になった）。初めに市長室を訪れたとき、市長は片方の眉を吊りあげたものだ。デスクのほうを向いた椅子に掛けたわたしのとなりで、以前より大人になったアテイカスがもうひとつの椅子に座り、彼女の一言一句に耳を傾けていたからだ。

「あなた、犬が椅子にあがっても叱らないの？」。市長は、いかにも不服そうに言った。

「ええ、もちろん。市長だって、政治家が椅子に座っても叱らないでしょう？」

しばらくすると、この市長もアテイカスを歓迎するようになり、椅子に座っても嫌な顔をしなくなつた。

こうしてアテイカスは市長室の常連になった。市役所で開かれる様々な会議にも一緒にきて、わたしと並んで堅い木のベンチに座った。アテイカスの下にはフリースのジャケットを敷いてやった。会議がどれだけ長引こうと静かに座り、話に注意深く耳を傾けた。居眠りをしないという点で言えば、傍聴人や一部の議員よりも行儀がよかった。わたしは、最新号の新聞でどんな記事を書いたかによって、愛想よくされることもあれば、非難されることもあった。だがアテイカスは、市役所にいくとかならず歓迎された。アテイカスと呼ばれることもあれば、ミスター・フィンチと呼ばれることもあった。

アテイカスが身体的にも社会的にも成長をみせはじめても、時おりわたしは、それまでと同じように彼を腕に抱きかかえた。習慣になっていたし、ふたりともそれが気に入っていたのだ。街角で知り合いと立ち話をはじめると、彼は仲間外れになったと思うらしく、脚に鼻をこすりつけてくる。そこでわたしはアテイカスを抱きあげ、おしゃべりを続けた。アテイカスは、わたしたちの仲間になり、同じものを共有したがっていた。

消防士、銀行の頭取、子どもたち、校長、店員、ゴミ収集車の運転手、ホームレス。だれもが同じよ

うに、アテイカスをみると、かならず名前を呼んで挨拶をしてくれた。

アテイカスは、町にある数軒のレストランでも常連になった。ある店では、中にある席に座り、チキンやターキーを食べさせてもらう。別の店ではピザかベーグルをもらう。また別のレストランでは、席にいたるわたしを置いて、ひとり小走りで厨房に入っていく。すると、シェフやオーナーの歓声がきこえた。「おや、おでましたー！ 今日はいいいものがあるぞ、アテイカス！」

皮肉と言うべきか、わたしはニューベリーポートで自分らしさを作りあげてきたし、アテイカスも自分らしさを手にしつつあった。ところが、時がたつうちに、ふたつの個性は混じり合い、いつしかわたしたちは「トムとアテイカス」と一組で考えられるようになった。夫と妻が、家の外ではそれぞれの個性を失うようなものだろう。いつのまにか、約束事ができていた。わたしを夕食会に招くときにはアテイカスも招待しなくてはならないし、わたしを新しい店のオープニングセレモニーに招くときにはアテイカスも呼ばなくてはならない。片方が欠ける場なら、どちらも現れない。

友人たちが地元のアンナ・ジャックス病院に入院すると、アテイカスはかならずわたしと一緒に見舞いにいき、ベッドにあがって病人のとなりに座った。ふつうなら、犬は病室に入れてもらえない。アテイカスが特別扱いされるようになったのは、友人のヴィッキー・ピアソンを見舞いにいったときだ。ヴィッキーはみんなに慕われている実業家で、地域の中心的人物だった。当時は、教育委員会の一員に選ばれたばかりだった。その直後にがんが見つかったのだ。がんは、猛毒を持つ草のように、脊椎に絡みついていった。はじめて彼女の病室を訪れたとき、ヴィッキーは、甥っ子を連れてきてくれないかしら、といった。

わたしは看護師を振りかえり、小声で言った。モルヒネを多めに打ったのかい？ 甥っ子がだれのことなのかさっぱりわからないんだ。ヴィッキーはわたしの言葉をききつけ、乾燥してひび割れたくちび

るのあいだから、弱々しい声で言った。「なに言ってるのよ。一緒に住んでるくせに」そして、看護師に向かつて言った。「甥は、アテイカス・M・フィンチって名前なの」

それからというもの、アテイカスはヴィッキーのベッドの常連になった。腕を持ちあげる力を失っていたヴィッキーは、指だけを動かして、アテイカスにおやつを食べさせた。食べてしまうと、「甥」はとなり腹ばいになり、「叔母」の太ももの上にあごをあずける。するとヴィッキーは、アテイカスの垂れた耳を、そつとなでるのだった。

元気だった頃のヴィッキーは、アテイカスと一緒に食事ができる店にしかいこうとしなかった。わたしとランチをするときはかならずだ。アテイカスが同じテーブルについて一緒にランチを食べても、嫌な顔ひとつしなかった。

ヴィッキーは電話をかけてきて、こう言う。「ランチでもどう？」

「ああ、いいね」わたしは言う。「どこにいきたい？」

「ええと、さあ」

「なにか食べたいものは？」わたしはたずねるが、答えはわかっている。いつも、結局は同じ店に——ヘーパー・オニオン——落ちつくからだ。ヴィッキーはそのラップサンドイッチとサラダが大好きだった。だが、そこを選ぶ最大の理由は、テラス席でアテイカスと一緒に食事ができることだった。

アテイカスは、〈ヘアンダー・トード〉紙の配達日が好きだった。前夜の配達についてくるときもうれしそうにしていた。わたしは町のほぼすべての通りを運転しながら、一軒ずつ新聞を届けていった。年配の人たちは玄関口に、小さな（時には大きな）おやつのお包みを用意しておいてくれた。夜が明けて開店時間になると、今度は店を一軒ずつまわって新聞を届ける。アテイカスは、そこでも声をかけてもらったり、おやつをもらったりした。

配達之夜、アテイカスは助手席に座って静かにしている。軒先に新聞を置いてくるあいだドアを開けていても、外に出ようとはしない。ところが、ヴィツキーの家だけはちがった。彼女の家に着くのは、たいてい二十三時をまわる頃だ。到着すると、アテイカスはきまつて玄関までついてきた。ヴィツキーの家に招かれたことはないし、おやつが置いてあつたこともない。なぜかはわからなかったが、ここは友だちの家だと心得ているらしかった。

生まれて数年で、アテイカスは「ニューベリーポーター」という、希少な人種になった。犬だということとは関係ない。そもそも、アテイカスをペット扱いする者はひとりもいなかった。町の人々は、彼をみると顔を輝かせ、うれしそうに挨拶してくれた。アテイカスが新しい自転車のカゴから顔をのぞかせたとき、彼らがどれほど驚いたか、ちよつと想像してみてほしい。

わたしは自転車を一台買い、ハンドルの上に、補強した大きなスチールのカゴを特注で付けてもらった。大きく頑丈で、ミニチュア・シュナウザーが入っても安心だ。わたしは、アテイカスがカゴに入るのに慣れるまでたつぷり時間をかけようと、おおいに意気込んでいた。フリースの毛布も敷いて、体が痛くならないように準備した。慣れるまで二週間はかかるだろうと踏んでいた。

わたしの計画はこうだった。初めの数日は、カゴに座らせるだけにしておく。そのあとの数日は、カゴに入れたまま自転車を押し、駐車をまわる。準備ができてから、アテイカスをカゴにのせて自転車をこぐ。初めはどこへいくときも抱っこしていきなさい、というページの助言があつたからこそ、アテイカスは、初めて自転車のカゴに入れられたときも、あんなにわたしを信頼してくれたのだと思う。カゴに納まつたアテイカスは、落ちついて、問いかけるようにわたしを見上げた。「どうかした？　はやくいこうよ」とでも言いたげな顔だった。そこでわたしは、自転車を押して駐車をまわってみた。アテイカスが、さつきと同じ目付きでこちらをみる。わたしは、思いきつて自転車に乗ると、ペダルをこ

ぎはじめた。なんとアティカスは、腹ばいになることさえしないで、映画のE.T.さながら、まっすぐに背中をのばして座っていた。高級車のボンネットについている飾りのようだ。わたしはペダルを踏み、町をまわった。アティカスの立派な垂れ耳が、風を受けてはためいている。風を飲みこもうとしているかのように、うれしそうに口を開けている。飛んでいるようにみえた。町にいるたくさんの方たちは、わたしたちがそばを通ると喜んで声をあげた。アティカスは、その歓声を全身に受けていた。

まもなくアティカスは、「揺れる」という言葉を覚えた。道にできた穴や、線路や、低い縁石に近づくとき、わたしが「揺れるぞ」と声をかける。するとアティカスは重心を低くして衝撃に備える。平坦な道にもどると、ふたたび体を起こすのだった。

わたしとアティカスは、お互いを信頼するようになっていた。このときはまだ知らなかったが、数年後、この信頼関係が、とても重要になってくる。そのときわたしたちは、だれよりもページの助けを必要とするようになる。だが、さしあたっては、ページのいったとおりでいい。「あなたたちは大丈夫」そう、大丈夫だった。

アティカス、冒険と人生をくれた犬
トム・ライアン・著
金原瑞人、井上里・訳

発行：集英社インターナショナル（発売 集英社）
定価：1,800 円（本体）＋税
発売日：2017 年 12 月 5 日
ISBN：978-4-7976-7346-3 C0098

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)